

【報 告】

「いちかわ かぞえうた」プロジェクト活動報告 (1)

中村光絵、伊坪有紀子、宇杉美絵子、甲斐万里子、藤原明子

A case study of the local workshops for children “Ichikawa Kazoeuta” Project (1)

NAKAMURA Mitsue, ITSUBO Yukiko, USUGI Mieko, KAI Mariko, FUJIWARA Akiko

要旨

近年、市川市は、高い人口流動率による地域への関心の薄さ等、首都近郊特有の地域課題を抱えている。そこで市川市内にある保育者養成課程を有する大学に在籍する筆者らは、令和2年(2020)度大学コンソーシアム市川産官学連携プラットフォーム協議会共同研究助成を受け、「いちかわ かぞえうた」プロジェクトを立ち上げた。本プロジェクトは、和洋女子大学と昭和学院短期大学の学生と教員が連携、協働し、市川で育つ子どもが地域に親しみ愛着が持てる遊び歌とそれに付随する「遊びバリエーション」の創作と普及活動を通じ、地域文化遺産の利活用と地域活性化に資する学生の教育、育成の2点を目的としている。

創作した遊び歌を、地域の子どもを通じて家庭や地域コミュニティに広めることにより、「地域愛」を育むと共に、地域文化遺産の利活用を促す。また、市川で学ぶ学生が「いちかわ」を題材にした遊び歌とそれに付随する児童文化財や身体表現を創作し、保育所、幼稚園、認定こども園や地域で開催されるイベントでの実演を通じ地域の人と関わることで、地域活性化に資する人材の養成、育成を目指している。本稿は、これまでに創作した遊び歌とそれに付随する児童文化財、身体表現の制作、創作活動に焦点を当てて報告する。

キーワード：地域活性化 (regional revitalization)、市川 (Ichikawa)、保育者養成 (early childhood teacher program)、表現活動 (expressing activity)、児童文化財 (cultural assets for children)

1. はじめに

市川市が、豊かな自然に恵まれ、古くから人々の暮らしが営まれてきたことは貝塚や古墳等の遺跡が残されていることからもうかがえる。戦国時代には江戸川を挟んで多くの合戦が繰り広げられ、明治以降は作家や画家など多くの文化人が移住、滞在し作品を残していることから地域文化遺産に恵まれた土地と言えよう。人口は、昭和30年代後半から急増し、平成29年には49万人を超えた。現在も微増傾向にある¹⁾。しかし、近年は「高い人口流動率による地域への関心の低さ、都市的無関心と没交渉による地域コミュニティの崩壊など、首都近郊特有の地域課題を抱えている (p.3)」²⁾との指摘がある。高い人口流動率の要因の一つには「30代から40代前半と、5歳未満については転出超過傾向が高い (p.20)」³⁾ことから、地域課題解決の一つの手立てとして、幼少期から「地域愛」を育むことが有効であると考えている。

こうした状況を踏まえ、市川の地域課題に対応するため2018年に「大学コンソーシアム市川産官学連携プラットフォーム」が形成された。市川市にある高等教育機関のリソースを協働活用し、地域課題を実

実践的な学びの中で解決するところに特徴がある。市や産業界だけでなく地域の多様なステークホルダーと連携、協働できる「地域つながり力」を持った人材育成を目的としている。

そこで、筆者らは、市川で暮らし、育っていく未来の「いちかわ」を担う子どもに「地域愛」を育み、子どもを通じ家庭や地域コミュニティに広めることで、地域文化遺産の利活用を促すきっかけとなる教材の創作、制作、普及、波及を目指し、活動を始めた。「地域愛」を育むための教材は、子どもが遊びながら親しむことができること、保育に限定せず家庭や地域コミュニティに広めやすいことを鑑み検討した。地域研究を進める中で、市川市内平田地区に「問答かぞえうた」⁴⁾が伝えられていることがわかった。山崎・中川(森)(2011)は、明治期の音楽の教科書が西洋音階の曲が並ぶ中、わが国の子どもの大人も歌ってきた「俗謡」である数え歌が掲載されている要因について「だれもが歌える旋律であるがゆえに歌詞を変えて教材として教育に用いられた(p.91)」⁵⁾と考察している。数え歌は、地域コミュニティに広めやすい旋律であること、また、歌詞は、数に語呂を合わせることで多くの地区の文化遺産を紹介し得るため、数え歌を中心とした遊び歌を創作することとした。加えて、現代の子どもが親しみやすいように、数え歌を基にした児童文化財と身体表現(以下、「遊びバリエーション」)の考案を目指し、「いちかわ かぞえうた」プロジェクトを立ち上げた。

本プロジェクトは、筆者らの在籍する和洋女子大学と昭和学院短期大学の保育者養成課程の学生と教員が、連携、協働して実施している。子どもが親しみやすい遊びを創作、制作し、市川市内の保育所、幼稚園、認定こども園(以下、保育施設)で実演することで「地域つながり力」を持った人材の育成、養成を目指している。更に、市川市や地元メディアと連携し、広く発信することで広義の目標である子どもを通じ地域コミュニティへの波及効果が高まり「地域愛」を育むことにつながることを期待している。本稿では、遊び歌と付随する「遊びバリエーション」の創作、制作活動について報告する。

2. 「いちかわ かぞえうた」プロジェクト

2-1. 目的

「いちかわ かぞえうた」プロジェクトの目的は、①未来の「いちかわ」を担う子どもに「地域愛」を育み、地域文化遺産の利活用を促す教材開発と普及②「地域つながり力」を持った保育者の養成の2点である。

2-2. 全体計画と制作活動までの経緯

「いちかわ かぞえうた」プロジェクト当初の全体計画は、図1のとおりである。当初は、学生が市内の保育施設や地域イベントでダンス及びパネルシアター等のシアター系の児童文化財の実演をする計画であり、希望する保育施設への配布資料は実演の様子を収録したDVDを予定していた。しかし、2021年は、新型コロナウイルス感染症流行終息の気配はなく、学生の保育施設や地域イベントでの実演は断念せざるを得なくなった。

また、「遊びバリエーション」の創作に先んじて、市内の保育施設を対象に地域文化遺産の利活用に関するアンケート調査を行った⁶⁾ところ、「保育者及び子どもたちの地域への関心や地域愛を高める(育む)ために、どのような保育教材や資料、情報等があると良いと考えるか」の質問に対し、紙芝居、絵本、マップ・地図、CD、DVD、ペープサートの順であった。

これらの状況から、各保育施設への配布資料はDVDから、日常の保育で活用しやすい音楽CDとスケッチブックシアターへ変更した。なお、学生が実演している様子を録画した映像をYouTubeで公開し、ダンスの振り付けやスケッチブックシアターの演じ方を確認できるようにした。

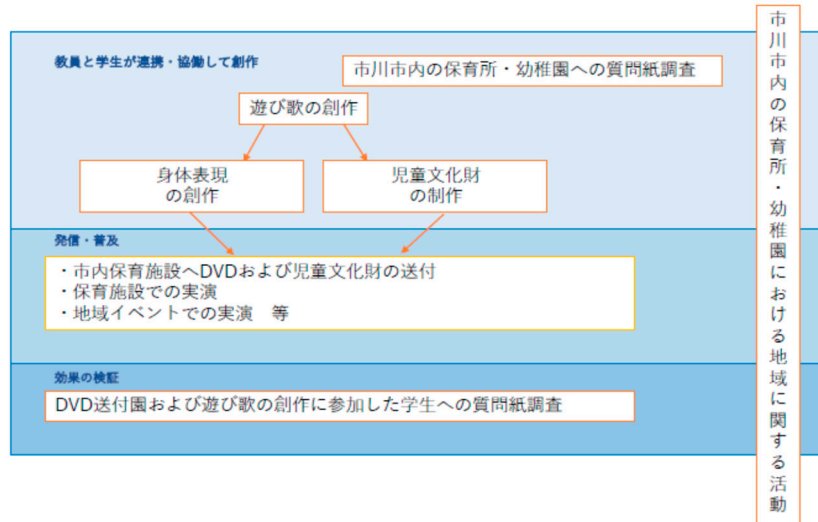


図1 「いちかわ かぞえうた」プロジェクト全体計画

伊坪有紀子ほか、「地域文化遺産の利活用に向けた取り組み(1) —いちかわ かぞえうたプロジェクト—」、2021年5月、日本保育学会第74回大会ポスター発表資料より引用。

3. 創作・制作

教員の専門性を考慮し「かぞえうた」は両大学で、児童文化財は和洋女子大学、身体表現は昭和学院短期大学の教員と学生で創作、制作を行った。

3-1. 「いちかわ かぞえうた」の創作

数え歌の創作の手続きは表1の通りである。

表1 対象および歌づくりの工程

大学 学部学科	昭和学院短期大学 人間生活学科こども発達専攻	和洋女子大学 人文学部こども発達学科
対象と授業形態	2年次「音楽表現法」15名 授業形態：ガイダンスは対面、以降はオンライン 実施時期：2020年12月後半～2021年1月前半	3年次「こども発達学ゼミⅠ」6名 授業形態：manaba courseを用いた完全オンライン 実施時期：2020年10月～11月末
学生について	ピアノ演奏技術による習熟度別全4クラスのうち、最上位クラスの学生。楽器の演奏や歌唱については積極的、意欲的な学生が多い。 創作活動については、1年次「保育内容：表現」でわらべうたの創作や即興演奏に触れている。	音楽への興味・関心が比較的高い者の集まり。音楽学習経験は多用かつばらつきがあるが、全員、ごく簡単な読譜及び記譜ができる。 「保育内容（音楽表現）」や「こどもと音楽Ⅲ」で創作やわらべうたの遊びを学んだ経験がある。
歌づくり ※丸囲み数字は授業回数（〇回目）を表す	① ガイダンスおよびグループ分け（3人×6グループ）【対面】 ②③④ 題材探しと歌づくり【オンラインおよび対面による個別対応】 ⑤ 動画の提出と振り返り、質問紙調査【オンライン】	【全6回】 ① 活動の趣旨および計画の説明 ② 題材探し（図書館や現地での調査） ③ 歌詞づくり ④ 旋律・伴奏づくり ⑤⑥ ブラッシュアップと仕上げ
提出および発表形式	歌詞および動画をオンラインにて提出し、他グループの作品も履修者内で閲覧できるようにした（上記⑤）。楽譜の提出は課さなかった。	manaba courseの「スレッド」を活用し、常に、教員とのやりとりや創作過程を相互に閲覧ができる設定で行った。

⁷⁾ 宇杉美絵子ほか、「表現活動を通じた地域貢献—短期大学と4年制大学での実践比較から—」2021年8月、全国大学音楽教育学会第36回全国大会、口頭発表資料より引用。

両大学で6作品ずつ計12作品が提出された。昭和学院短期大学の学生作品の曲調は、既存の手遊び歌の替え歌や、動物をテーマにしたものなど、子どもたちの歌いやすさを視点にした作品もあったと同時に、若者らしいラップ調でノリ良く歌えるものもあった。題材は、数字にはめ込む過程で、「1」は市川市動物園、「7」は梨、「9」はクロマツ等、同じような地名や名産品を挙げる傾向が高かった。学生のアイ

ディアから要素を抽出し、研究メンバーの教員が1曲として完成させた。和洋女子大学の学生作品の曲調は、わらべ歌の音階、同様のリズムや音階、簡単な伴奏を意識したコード進行等これまでの学習経験に基づいたものであった。題材は、市川市ゆかりの作家や、民話、むかしばなし、条例等、多岐にわたった。創作の過程で歌詞の強調や取捨選択を行う過程で数え歌ではない作品も生まれたが、各自1曲ずつ完成させた。

完成した曲を持ち寄り、プロジェクトメンバーでどの曲でどのような「遊びバリエーション」の創作、制作を行うか検討、決定した(表2)。

表2 曲目と「遊びバリエーション」

曲目	テーマ	遊びバリエーション
いちいちかわ	市川市の特産物や名所	ダンス、スケッチブックシアター
バラの変身	市民の花	体操
いちかわのおはなし	伝承民話	手遊び、読本
おはなのうた	「いちかわの花農家」	体操
いちかわぶんがくかぞえうた	市川市に縁のある文化人	ペープサート

実演用に採用された5作品(1曲2バージョン)のうち、本プロジェクトのメインの曲となる「いちいちかわ」は、ダンスとスケッチブックシアターを創作、制作することとした。また「いちかわのおはなし」は創作した学生が、歌づくりの過程で手遊びを考案しているため、動きではなく保育者が、手遊びの背景にある伝承民話を子どもたちに伝えやすいように読本の作成が加えられた。

3-2. 児童文化財の制作

「遊びバリエーション」のうち、ペープサート、スケッチブックシアターの制作は和洋女子大学で担当した。児童文化財の制作の手続きは表3の通りである。

表3 対象および児童文化財制作の工程

大学 学部学科	和洋女子大学 人文学部こども発達学科
対象と活動形態	2年生~4年生を対象に研究協力者を募集し、希望した4名(2年生3名、3年生1名) 活動形態:対面(週1回、和洋女子大学こども造形実習室) 実施時期:2021年4月前半~5月末、7月上旬
学生について	児童文化財の制作のみならず、保育施設等での実演への意欲が高い。2年生3名は「こどもと表現」、3年生1名は加えて「こどもと造形」「保育内容(表現)の指導法」を履修していて、描画材等の基礎知識は学んだ経験がある。3年生は保育実習Iを経験している。
児童文化財の制作と実演練習 ※○囲み数字は回数(○回目)を表す。	①「いちかわぶんがくかぞえうた」「いちかわのおはなし」の歌詞を分析、題材となった人物、伝承民話について調べる。 ②ペープサート「いちかわぶんがくかぞえうた」、読本「いちかわのおはなし」のデザインについて検討 ③④ペープサート「いちかわぶんがくかぞえうた」の制作 ⑤スケッチブックシアター「いちいちかわ」の歌詞を分析、デザイン案の検討 ⑥⑦スケッチブックシアター「いちいちかわ」の制作 ⑧完成したペープサート「いちかわぶんがくかぞえうた」スケッチブックシアター「いちいちかわ」と手遊び「いちかわのおはなし」の演じ方の検討と練習
提出および発表形式	対面に提出 作成した児童文化財を用いてペープサート、スケッチブックシアター及び手遊びを演じている場面を撮影し動画で記録した。

早めに曲が完成していた「いちかわぶんがくかぞえうた」「いちかわのおはなし」の歌詞の分析から始めた。「いちかわぶんがくかぞえうた」は、ペープサートの作品である。学生全員がペープサートに触れた経験があることに加え、題材も片面に人物、裏面に作品にまつわるイラストで構成されるためイメージしやすいことから、最初に取り掛かった。学生が中心となり担当する人物を決め、描画材も指定せず、それぞれが使いやすいあるいはイメージに合った水性ペン、水彩絵の具、パステルなどを組み合わせ使用し制作した(写真1、2)。

ペープサートに続いて、スケッチブックシアターの制作に取り掛かった。1作品を制作する過程でメンバー間でのコミュニケーションが円滑になり信頼関係が築かれたことで、各々の個性を尊重しあい積極的にアイデアを出し合う姿が多くみられた。音楽を聴きながら演じることを想定し、これまでの実習経験や自らの幼児期と照らし合わせ、より楽しんでもらうためにはどのような画面の大きさや仕掛けが効果的か検討するなど、学生主体で展開された(写真3、4)。スケッチブックシアターの完成をもって学生の制作に関する研究協力期間が終了したため、読本はプロジェクトメンバーで制作することとした。



写真1 制作の様子



写真2 完成したペープサート



写真3 スケッチブックシアター制作の様子



写真4 演じ方の確認

3-3. 身体表現の創作

「遊びバリエーション」のうち、ダンスと体操の創作を昭和学院短期大学で担当した。手続きは表4の通りである。

表4 対象とダンス・体操の創作の工程

大学 学部学科	昭和学院短期大学 人間生活学科こども発達専攻	
	A	B
対象と授業形態	1年次「保育内容の指導法（情報機器の活用を含む）」1名（科目等履修生） 授業形態：対面 実施時期：2021年2月前半	2年ダンス部有志 2名 実施時期：2021年6月中旬～7月頭
学生について	在学時に「幼児体育」「保育の身体表現」を履修している、子どもの身体発達や表現活動について学んだ経験がある。	ダンス部に所属している、興味関心が高い。1年次に「幼児体育」を履修している、子どもの身体発達と活動について学んだ経験がある。
ダンスづくり ※○囲み数字は(○回目)を表す。	①「おはなのうた」「バラの変身」について音楽と歌詞を分析 ②③テーマとなる動きを歌詞と音楽から考案・発表	①「いちいちいかわ」テーマの振付を考案 ②③「いちいちいかわ」のダンスを学生のテーマを基に教員が振付 学生は振りの練習と発表
提出および発表形式	対面にて発表 撮影し動画を記録した。	対面にて発表 撮影し動画を記録した。

「おはなのうた」「バラの変身」の動きは、学生が曲のイメージから創作し、完成形が1作品ずつ提出された。実演用に採用された5曲の「遊びバリエーション」のバランスを見て、音楽に合わせた体操として楽しみながらウォーミングアップやストレッチの効果を狙う動きを加え完成させた（写真5）。

「いちいちいかわ」を担当した学生2名の保育実習期間が異なってしまう、共に動きを考案する時間が十分に取れなかったため、学生が考案したテーマ部分の振り付けを教員が膨らませ完成させた（写真6）。教員の振り付けを基に学生が練習し、動画で記録した。タイトなスケジュールであったが、意欲的に取り組み、発表することができた。



写真5 「バラの変身」発表



写真6 「いちいちいかわ」練習の様子

4. 今後の課題及び展望

本稿では、「いちかわ かぞえうた」プロジェクトの概要と本プロジェクト内で創作、制作した「かぞえうた」と「遊びバリエーション」について報告した。2021年9月に研究協力園へは本研究の成果物である数え歌が録音されたCD、スケッチブックシアター、動画を視聴できるURLを記した読本を送付している。今後は、制作した動画を市川市の広報課や地域の情報番組を作成しているJ:COM等、市役所や民間

企業の協力を得ながら広く発信していく計画である。

また、新型コロナウイルス感染症の流行状況を見ながら、保育施設等で学生の実演を行いたいと考えている。更に、保育施設を対象に、地域文化遺産の利活用における教材の効果と、プロジェクト参加学生を対象に、学生の「地域つながり力」育成への効果の検証を行う予定である。

【謝辞】

本研究は、「令和2年度大学コンソーシアム市川産官学連携プラットフォーム協議会共同研究助成事業」に採択され関係各所からご支援いただきました。本研究にご協力いただきました市川市こども政策部、市川市内保育施設及び本プロジェクトに参加した和洋女子大学人文学部こども発達学科の学生と昭和学院短期大学人間生活学科こども発達専攻の学生の皆様に深く感謝申し上げます。

【付記】

市川市内の保育所・幼稚園への事前調査は、昭和学院短期大学ヒトを対象とする研究に関する倫理審査(承認番号2020-01)の承認審査を受け実施している。歌づくり、児童文化財、身体表現の創作、制作は、和洋女子大学人を対象とする研究(承認番号:2039)の承認審査を受け実施している。

【引用文献】

- 1) 市川市公式Webサイト 統計資料2. 人口
<https://www.city.ichikawa.lg.jp/common/gen01/file/0000360797.pdf> 2021/09/01参照.
- 2) 大学コンソーシアム市川産官学連携プラットフォーム～首都近郊特有の地域課題解決へ向けた「地域つながり力」を持つ人材の育成中期計画2019年度～2023年度(2019)
https://www.cuc.ac.jp/social_contribution/collaboration/i_consortium/mstsp000000xoy9-att/keikaku2019_2023.pdf 2020/09/01参照.
- 3) 市川市まち・ひと・しごと創生総合戦略<<2015-2060人口ビジョン編>>(2016)
<https://www.city.ichikawa.lg.jp/common/000226144.pdf> 2021/01/07参照.
- 4) 市川民話の会編著(2012)『市川のむかし話』市川民話の会、pp.154-155.
- 5) 山崎浩隆・中川(森)みゆき(2011)「明治期の唱歌における数え歌」熊本大学教育学部紀要人文科学第60号、pp.185-192.
- 6) 伊坪有紀子・藤原明子・中村光絵(2021)「地域文化遺産の利活用に向けた取り組み(1)―いちかわ かぞえうた プロジェクト―」日本保育学会第74回大会発表論文集、pp.163-164.
- 7) 宇杉美絵子・甲斐万里子(2021)「表現活動を通じた地域貢献―短期大学と4年制大学での実践比較から―」全国大学音楽教育学会第36回全国大会、プログラムWeb版、pp.12-13.

中村 光絵(和洋女子大学 人文学部 こども発達学科 助教)

伊坪有紀子(昭和学院短期大学 人間生活学科 准教授)

宇杉美絵子(昭和学院短期大学 人間生活学科 准教授)

甲斐万里子(和洋女子大学 人文学部 こども発達学科 助教)

藤原 明子(昭和学院短期大学 人間生活学科 准教授)

(2021年10月12日受理)